

**② 入試区分**

編入学（Ⅰ期）

**③ 出題科目**

小論文

**④ 出題の意図**

古典～近代の日本文学・日本語学の専門的な学修を、日本文学科三年次に編入学して進めていくために必要な能力を測ることを目的としている。高校教科書等で学習することも多い古典文学作品の一節を読み、問いの指示に従って分析・考察し、それを指定の字数で過不足ない文章にまとめ、記述する。的確な読解、分析・考察の妥当性、文章の構成・表現・表記の適切さを見る問題となっている。

## 文学部日本文学科編入学試験問題

次の文章は、『伊勢物語』の一節である。その主題について考察しなさい。解答に際しては、まず本話の要約を示し、続いて、もとの女が隠れている男の存在に気付いていない場合の主題を述べ、次に気付いていた場合の主題を考察するに当たり、気付いていたことを示唆する本文中の箇所を明示しながら分析してまとめること。字数は四百字以上五百字以内で、解答は解答用紙に記入しなさい。

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、おとなになりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は「この女をこそ得め」と思ふ。女は「この男を」と思ひつつ、親のあはすれども聞かでないむありける。

さて、この隣の男のもとより、かくなむ、

筒井筒井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、「もろともにいふかひなくてあらむやは」とて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所出で来にけり。さりけれど、このもとの女、「あし」と思へる気色もなく、いだしやりければ、男、「異心<sup>ことこころ</sup>ありてかかるにやあらむ」と思ひ疑ひて、前裁のなかに隠れゐて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、「限りなくなし」と思ひて、河内へも行かずなりにけり。

(注)田舎わたらひ…田舎で生計をたてること　恥ぢかはしてありけれど…お互い恥じらい合っていたが　あはすれども…結婚させようとするけれど　筒井筒…円形に掘った井戸の地上部分の囲い　かけし…測り比べた　まろがたけ…私の背丈　妹…男性が女性を親しんで呼ぶ語　振り分け髪…昔の子供の髪型　君ならずしてたれかあぐべき…あなたではなくて誰が髪上げをしましょうか　本意…もとの望み　頼り…頼りとする者　もろともにくあらむやは…一緒に貧しい暮らしをしていられようか

異心…浮気心　前裁…前庭に植えた草木　風吹けば沖つ白波…「立つ」を導く序詞

文学部日本文学科編入学試験 解答用紙

受 験 番 号				

